

研 究 分 野	資源生態	部 名	漁場環境部
研 究 課 題 名	アカイカ未利用資源調査		
予 算 区 分	県単		
試験研究実施年度・研究期間	H18～20		
担 当	黄金崎 栄一		
協 力 ・ 分 担 関 係	独立行政法人水産総合センター、社団法人漁業情報サービスセンター		

〈目的〉

漁場として、且つ、研究として空白地帯である当該海域の資源状況及び、生態、漁場形成環境等を調査することにより、効率的な操業を可能にすると共に、マクロな視点に立った「北太平洋アカイカ資源」を評価する。

〈試験研究方法〉

4月～1月にかけて、太平洋において試験船による漁獲調査を実施するとともに、周辺海域の海洋観測を行い漁場環境の把握に努める。

また、資源評価のための基礎となる、いか類の漁獲統計及び中型イカ釣船の漁獲データの整理を行う。

〈主要成果の具体的なデータ〉

アカイカ未利用調査は表-1に示すとおり、4月から1月まで延べ4航海、漁獲調査は68回（一晚2回含む）の釣獲調査を実施した。

表-1 試験船調査実施状況

船名	操業開始月日	操業終了月日	操業回数	海 域
開運丸	4月13日	4月27日	11回	太平洋
開運丸	11月9日	11月20日	20回	太平洋
開運丸	12月8日	12月21日	18回	太平洋
開運丸	1月10日	1月25日	19回	太平洋
合 計			68回	

得られたデータは、漁況予測及び

資源評価に利用すると共に、リアルタイムで漁獲状況を通報又は八戸無線局を通じて情報提供を実施した。

また、ウオダスへ掲載することでより広い範囲に対しての情報提供も実施している。

18年度漁期のアカイカの水揚げ量は1,945tで前年比の19%にとどまった。

春季170度以東海域での漁獲を7月の水揚げで見ると、1,737t（17年は928t）と前年比187%と好調な成績となったが、冬季1月から2月の150度以西海域での漁獲状況は、165t（17年は8,849t）で前年の2%の水揚げしかなく、公海流し網がモラトリウムになった1993年以降では最も水揚げが低い年となった。

開運丸の調査でも、11月に41N,146E付近で好漁点を見つけた他は12・1月の調査での好漁場の発見はなく、冬季の道東から三

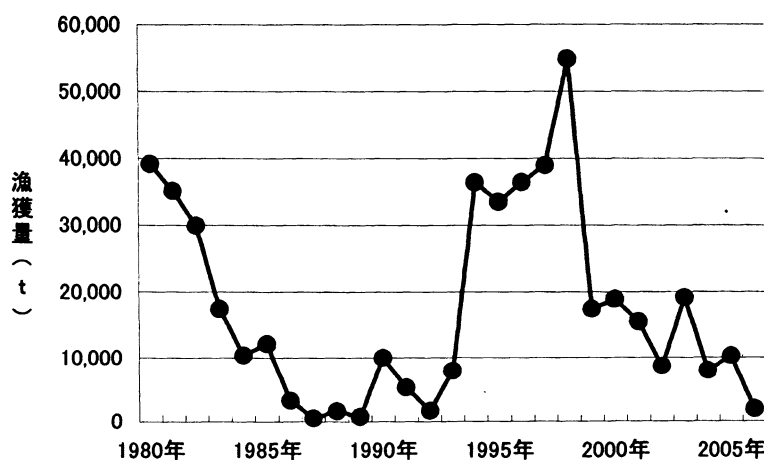


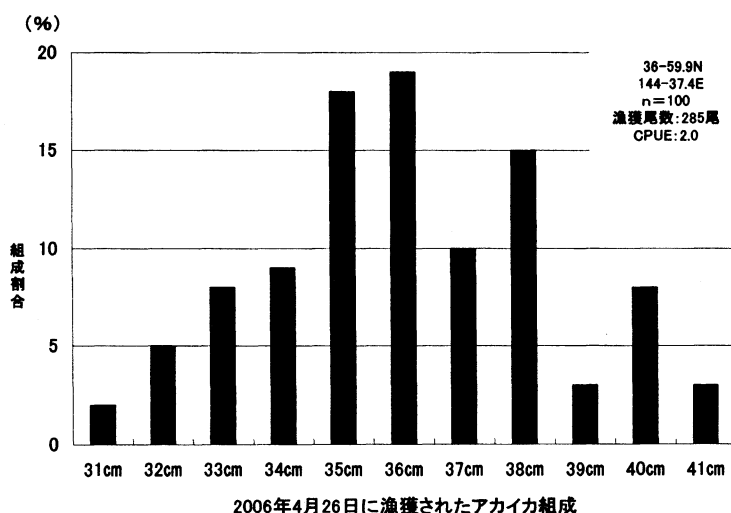
図-1 中型船によるアカイカ漁獲量の経年変化

陸・常磐にかけての漁場形成が見られない年であった。

この要因としては、もともとの海域への来遊量が少なかったことや、143E 付近を中心とする海域の北上暖水の勢力が強く、沖合いからの加入の妨げになった可能性が推察される。

本年度の調査で注目される事項として 4 月調査時に漁獲されたアカイカが挙げられる。

調査は時化などにより予定された内容を消化できなかったが、調査最終日で漁獲されたアカイカの組成を見ると、31 cm～41 cm の範囲でモードが 36 cm と従来 150 度以西海域で多く漁獲される冬・春発生群と違い、170 度以東海域で漁獲される秋季発生群と同じような組成のイカが漁獲されたことが本調査の成果と言える。



もともと、この海域では流し網が行われる前までは、秋季発生群の存在が確認されているが、流し網による漁獲圧が影響したことにより、資源量が激減し近年では漁獲対象とならなかった資源であったが、僅かではあるがこのような資源が確認されたことは、春季に 170 度以東海域までわざわざ行かなくても近海での操業が出来れば、中型イカ釣り船経営の経費軽減に繋がる可能性が出てきたことになる。

〈今後の問題点〉

平成 19 年度には、試験船東奥丸が廃船となることが決まっており、今までのようにアカイカを重視した調査が出来なくなる。

このことから、残された試験船の運航について更に効率よく計画し、調査体制も今までと違った形の調査を組む必要があると思う。

〈次年度の具体的計画〉

今年度の冬季のアカイカ漁獲は今までに無い低調な状況となったことから、漁場形成及びその予測について今まで以上に取り組む必要がある。

〈結果の発表・活用状況等〉

平成 18 年度イカ釣り漁場開発調査資料 32 号